



やったり、やられたりで育つ心

園長 野中 泉

もも組の懇談会で保護者と一緒に観たビデオには、けんかする、いえ、けんかというにはまだまだ幼い1歳後半から2歳を少し過ぎた子どもたちが激しく『やりあう姿』がたくさん映っていました。1冊の絵本を3人で3方向から取り合って譲らず、泣きながらひっぱりあう姿。お気に入りの狭い隙間にご満悦で入り込んで遊んでいたら、後から来た友だちに力づくでその場所を取られそうになり、必死で「やめてよ～」と抵抗し泣き叫ぶ様子。我を通そうとして友だちを強く押ししたり、引っ張ったり、果ては手に持っていた電車のおもちゃでポカリと叩いたり。まだまだ、自分の気持ちを表現することに精一杯で相手の思いに気づくまでには至らない1歳児らしい不器用で、少しヒヤヒヤするやりとりがいっぱいでした。

ビデオを観終わった後の保護者からは「家では、もっと激しい」「こんなふうに、友だちとやりとりが増えていることはうれしい」「今日はやられていたけど、いつか挽回する日もくる」というように、思ったよりずっとおおらかな感想が続きました。でも一方で「やられることはそんなに気にしないが、自分の子がやってしまう側になってしまったら、友だちに怪我をさせたらどうしようと、それが心配」と何人もの保護者が同じことを口にしたのも、印象に残りました。

そんな中、会も終盤になって感想の順番が回ってきたひとりのお母さんが、「正直、ビデオを観ていて、辛かったです」と言葉を詰まらせました。トラブルの場面に、みんなより少し登場回数が多かった子のお母さんです。「お姉ちゃんの時は、やられる側であることが多く、やられた傷に心を痛める母でした。だからこそ、今度は自分の子がやる側であることがショックだし、相手の親御さんにも申し訳なくて。お迎えに行く度に今日は、お友だちを噛んでしまった、今日は押して怪我をさせてしまって聞くのが本当に辛くて、家に帰って『なんで、そんなことするの』と息子に言い聞かせるけど、1歳の子が、翌日からしなくなるわけではないし…」何度も涙をぬぐいながら話してくれた正直なその言葉に、輪のあちこちで目を潤ませるお母さんがいたのは、そこにいたみんなが、彼女の苦しさは、昨日の私と同じと思いついたり、明日の私の苦しみかもしれないと想像したりしたからかもしれません。

彼女の感想を受けて、こんなふうに意見してくれたお父さんもいました。「アトムの子育ては、けんかを基本的に止めないけど、親が毎日迎えに来るたびに辛い思いをして帰るなんて、そんなのやっぱり違うと思う。発達に個人差がある1歳児のやりとりを理解した上で、きちんと介入して、大きなトラブルにならないようにするのも、保育士の大事な仕事、専門性じゃないのか」。真摯なその問いに応えながら、改めて、私たちが目指す保育は何か、日々にそれを伝える言葉は充分であったかなどを振り返る大事な話につながっていったのですが、そのやりとりを受けて、別のお父さんはこんなことを言ってくれました。「噛まれた傷やひっかかれた傷が残るとその傷にばかり気がいきがちだけど、でも、その時々、子どもには傷の痛さとか、相手を泣かせてしまった複雑な気持ちとかのいろんな体験も積み重なっていて、実はその方がずっと大事なちやうかなと僕は思う。さっきのビデオみたいに突然背後から自分の場所をとりにくる理不尽な奴に出会ってびっくりしたり、泣きながら必死でおもちゃをとりあたりしながら、自分のいろんな感情に気づいていく。大人が常に先回りしてけんかを止めたり、家で親が守ってたら怪我はないかもしれない。でも、そうしたら、そんな体験も重なっていかないよなって思う」。上の子での体験から泣いた母の気持ちがよくわかるという別のお母さんは「今は、〇〇君にスポットがあたってるかもしれないけど、次はうちかもしれんし、違う子かもしれん。先生たちは、どうにか怪我なく子どもを返したいと思ってくれるかもしれんけど、でも、ここでのこんな体験って、ほんとに他所ではでけへん。例えば公園で初めて会ったお母さんとは無理やねん。それは、こんなふうにお父さん、お母さんの正直な気持ちみんな聞きあって、みんなでみんなの子どもたちの成長見守ってこうって関係があってこそやと思う」と自分も泣きながら語ってくれました。

ビデオでは、どのけんかの場面でも至近距離に保育士がいます。手を伸ばして止められる距離で「〇〇ちゃんも、使いたかったよ」「嫌だって泣いているで」と友だちの気持ちを代弁しながら、ギリギリまで手を出さず、子ども同士のやりとりを見守る保育士たち。すると1歳児といえども、そのうちに当事者同士折り合いがつかない、わらわらと集まってきたやじうまの友だちに慰められて気が済んだり、子どもの世界の中で決着できていくそんな場面もビデオには映っています。でも、その「待ってやりたい」はいつもリスクと隣りあわせ。寸前で噛んだり引っかいたり止められない度に、申し訳なかつたり辛かつたり葛藤の日々。けれど、その葛藤を一番理解してくれているのも、応援してくれているのも、やっぱりアトムの親たちだと、こんな懇談に出るたび思います。